

「政治の劣化」を厳しく問え

この1ヶ月余りの政治劇は、あらためて「政治の劣化」を国民に見せつけた。安倍首相は所信表明演説後、代表質問直前に辞任表明を行った。9月13日付毎日社説も「これは政権の放り投げであり、まったく無責任な態度としか言いようがない。こういう首相がわが国のトップリーダーであったことを恥ずかしく思う」と述べる。小泉元首相も自らの責任を棚上げにして、「まさかあのような形で退陣するとは思わなかった」と振り返っている。

無責任きわまりない辞任劇のあとは、自民党総裁選「ワイドショー」が続いた。総裁選ではほとんどの派閥が福田支持に回った。小泉時代に「ぶっ壊された」はずの派閥が、ここにきて急に息を吹き返した。安倍路線の総括も何も無いまま、ひとたび「勝ち馬」とみるや、「福田雪崩」となった。1年前の「安倍雪崩」と見まごうばかりだ(9月15日付朝日社説)。それにしても首相臨時代理もおかず、国会を「開店休業」にして、参院選から2ヶ月近くにわたる「政治空白」のツケは大きく、自民党の政権担当能力が疑われる。

新トップリーダーとなった福田首相は自ら「背水の陣内閣」と名づけ、国会論戦の前に危機感を強調した。9月26日付社説も、「政策実行へ難局を乗り越えよ」(読賣)「手探りで船出する福田『協調』内閣」(日経)といったタイトルを掲げた。新内閣は世論調査で発足時としては高い支持率を確保した。調査で浮かび上がった民意は、安定感への期待であり、「荒々しい政治」からの転換であった。

ここで注意したいのは、安倍前内閣の下で憲法改正に向けた国民投票法成立、教育基本法改正、防衛庁の「省」昇格などが実現したことを「歴史的な成果」(9月26日付読賣)と持ち上げる論調である。このような安倍路線は参院選での歴史的な大敗によって国民に否定されたのではないのか。

福田政権が船出して、小泉・安倍時代に幕が下りたのか。「個性や主張が対照的なリーダーにすげかえて、いわゆる『擬似政権交代』で世論を納得させる。自民党が得意としてきた政権延命への知恵」(9月24日付朝日)は、今回もうまくいくのであろうか。野党とともにメディアの監視を期待したい。

* 『ジャーナリスト』595号、2007年10月25日、「マスコミ評」掲載前原稿